Scool!!

白金千乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｓｃｏｏｌ！！

【Ｎコード】
Ｎ５８２５Ｕ

【作者名】
白金千乃

【あらすじ】
私立天祥学園。生徒の生徒による生徒のための学園。
君臨する生徒会長（女帝）。特技：専業主婦の幼馴染。
万年二位の優等生。そして一位の学園王子。
ドＳでドＭな先輩、やる気０の後輩。
今日も今日とて、にぎやかな声は聞こえてくる。

＊作者サイト　Ｐｔ．７８（ｈｔｔｐ：／／ｍｕｕ．ｉｎ／ｃｈｉｎｏ／）　にも掲載しています

登場人物

［天祥学園］

とある所のとある学園。生徒主体がモットーである、自由な学校。

ただし規則などはしっかりしており、全体的素行は良い方である。

帝人王貴（みかど おおき）　生徒会長　２年

穏やかで一見儚げだが、実際は強い。

面白いことが好きで、お茶目な性格。

得意科目は国語、苦手科目は化学と体育。

上條九郎（かみじょう くろう）　生徒会　２年

面倒見がよく世話焼きな性格。そのため苦労性。

常に振り回されるが周囲にとって頼れる存在。

得意科目は国語、苦手科目は数学。

鈴村亜丞（すずむら あすけ）　生徒会　２年

器用であり、大概のことは何でも普通以上に出来る。

人をからかうのがもはや趣味。根は常識的である。

得意科目は社会、苦手科目は国語。

前原世乃（まえはら せの）　生徒会　２年

小心者なので真面目。勉強はするものだと思っている。

優良模範生だが、成績は常に二位。

得意科目は数学、苦手科目は英語。

笹希雪（ささ きゆき）　２年
気が強くさばさばしており、ある意味男らしい。
弄るのは好きだが自分が弄られるのは苦手。
得意科目は英語、苦手科目は数学。

倉石王次郎（くらいし おうじろう）　２年
爽やかでお人よしな面がある通称”王子”。
しっかり者で頭は良いがどこか抜けている。
得意科目は数学、苦手科目は芸術。

高良和氏（たから かずし）　２年
明るく行動的で、あまり落ち着きが無い。
勉強は苦手だが勘は鋭い。
得意科目は体育、苦手科目は数学。

朝比奈凌（あさひな しのぐ）　２年
冷静で真面目な面も持つが、人をからかう事が趣味。
周囲のことに鋭く、面倒見は良い。
得意科目は国語、苦手科目は理科。

宮野慧斗（みやの けいと）　生徒会　１年
無愛想で歯に衣着せぬことが多いが礼儀はわきまえる。
クールというより面倒くさがり。
得意科目は英語、苦手科目は国語。

東堂真幸（とうどう まさき）　風紀委員長　２年
生真面目な性格で物事に対し真剣。
短気で怒りっぽいが素直。
得意科目は国語、苦手科目は社会。

厳木風子（きゅうらぎふうこ）　体育委員長　２年
才色兼備で、自分でもそれを知っている。
自身がある分実力も伴っている。
得意科目は英語、苦手科目は理科。

大川内愛理（おおかわちえり）　２年
ツンケンしているが、人見知りで根は優しい。
素直でないことを自覚しており、悩んでいる。

御堂司春（みどうしはる）　元生徒会長　３年
人を困らせるのと困らせられるのが好き。
万能で大抵の事はそつなくこなせる。
得意、苦手科目は無し。

沢城六花（さわしろりっか）　元生徒会　３年
真面目だが抜けたところがあり天然。
やや辛らつで、（主に司春に）すぐ手が出る。

［聖名下学院］
さる場所にあるさる学院。学長を通じて、天祥学院とは交流がある。

里見行平（さとみゆきひら）　生徒会長　２年
わざとらしい口調と態度をわざと行っている面倒な正確。
常識はわきまえているが、面倒くさい。

秋篠永久子（あきしのとわこ）　生徒会　２年
お嬢様らしいお嬢様であり、お淑やか。
マイペースであり、人のペースを自然に崩す。

その日、ある学園で

まだ暑くなりきらない暖かな日。
窓から差し込む日の光に、カップに注がれた紅茶が反射して光る。
そこからふわりと香る甘くてほろ苦い匂い。
ここは、生徒会室。

「……いや、おかしいだろ」
「何が？」

普通にお茶を入れながら、上條九郎は呟く。
ここは生徒会室、学校。
決して、どこかの豪邸の私室などではない。

「別にいいだろ、生徒会”長”室なんだし？」
「はいはい、勝手に一文字足さない」

お茶請けの菓子をほおばりながら、鈴村亜丞はさも当然の様に言う。
そして、窓の外の景色に目を向けた。

開いた窓から入ってくるのは、部活動だろう、元気な掛け声。
音合わせをしている楽器の響きも流れてくる。

「それに、休日だし」
「平日でも同じことするでしょ」
「世乃、おかえり」
「まあな」

扉をあけたことにより風が室内を通り抜ける。
流れる髪を押さえながら、前原世乃は机の上に書類を置いた。

「王貴ちゃんは？」
「散歩」
「大丈夫なの？外、結構日差しが強かったけど……」
「すぐ戻るって言ってたし、たぶん」
「大丈夫だろ、問題が起きたわけでもない…」

ガシャン！！

「……」
「……」
「……」

3人は沈黙したまま。

勢いよく立ち上がると、生徒会室から駆け出した。

「窓ガラスが……」

見事に割れて散らばったそれを見て、世乃は額に手をやり青ざめた。

ガラスの破片の中に、野球ボールが紛れている。

周りに人の姿は無く、どうやらけが人は居ないらしい。

その点に、九郎は少し安堵した。

「野球部か？」

「……違う。うちの野球部のボールじゃない」

手に取ったボールを亜丞は掲げて見せた。

真っ白で、あまり使われていない新しいもの。

「うちのは全部、校章がついてるんだ、ご丁寧に」

「……て、ことは」

「おいおい飛ばしすぎだろー」
「なーにやってんだよー」
「うるせー、ホームランだよ！」

「「……」」
「まーた面倒なことに……」

どうやら外部の人間が入り込んでいたらしい。
普段なら警備員に止められるのだが、上手く入り込んだようだった。

「……世乃はとりあえずガラス片付ける用意してきてくれ」
「え、でも……」
「いいから。こっちは何とかする」
「わ、わかった」

世乃が行ったのを見送り、亜丞ははあ、と息をついた。

「絡まれたら面倒だからな」
「世乃、ああいう輩は苦手だし」
「……王貴はどうする？」
「終わった後で知らせよう。今はとりあえず、行こう」

割れたガラスから離れた場所。
私服だが恐らく高校生か少し上の男が3人、そこに居た。
いかにも、と言った空気感に、少し引きながらも九郎は尋ねた。

「このボール、あんた達のか？」
「お、何だ何だ？」
「このボールで窓ガラスが割れたんだ」
「とりあえず話を聴くから校内に……」

「げ、マジかよ」
「おい、ガラスはまずいんじゃね？」
「いこうぜ！」

「っておい！」

話を聴くどころかそそくさと逃げ出そうとし始める男達。
走り出す3人を、九郎と亜丞は慌てて追いかける。

「お前らの学校だろー」
「だったら自分達で何とかしろよ！」

「あいつら……」

追いかけながら、亜丞が怪しい笑顔を浮かべて右手をぎゅっ

と握り拳を作る。
が、ふと前を見て真顔になり、足を止めた。

「亜丞！？何で……」
「前」
「前？……あ」

言われて前を向き、そして同時に九郎の表情と動きも停止する。

「おわ！！？」

前を走っていた男達の脚も止まった。
目の前に表れた、超高速回転を行い通り過ぎていった猫車によって。

「な、なんだあ！？」
「猫車、見たことありません？」

そこに立っていたのは、少し大きめの上着を羽織った少女。
猫車を忘れるほど、猫車とは結びつかない様な印象の少女だった。
少女は、男達の前に行き、尋ねた。

「窓ガラスを割ったのは、あなた達？」
「なんだ？お嬢さん」
「だから、窓ガラス、割ったの？」
「おーおー、怖い怖い」

真剣な口調で尋ねるが、相手は小柄な少女。
男達はからかい気味に笑いながら、少女に近づいていく。

「威勢がいいのはいいが、危ないぜー？」
「ほら、怪我したくなかったらそこをど「そんなこと聞いてないんだけど」
「「「え」」」

少女は一喝すると、にこりと微笑んだ。
そして。

「ガラスを割ったのか、って聞いてるの。君たち何なの、部外者がうちで何してるの。
ああ、ふざけてるの？まったく大概にしてほしいよね、そういうの。聞き分けの無い子供じゃないんだからさ。
大体まず無関係の学校に進入する意味が分からないよ。やるなら自分の学校に行けばいいんじゃないの？
それとも、どうしてもうちの学校に入りたかったの？それはまあ光栄だけどいい迷惑だよね。
そして無断進入の上の器物損害、しかもすりガラス。知っ

てた？あれって普通のガラスより高いんだよ。
その上で謝罪もなしに逃亡……呆れた行動だよね、本当。
常識以前にまず人としてどうかしてるの？それなら仕方ないかもしれないけど。
で、別にここでガラスと一緒に片付けてもいいんだけどどうする？そうする？するか」

勢いで捲し立て上げられながら、男達はただただその場に静止していた。
否、動くことなど出来なかった。

少女は終止、穏やかな様子のままだった。
ただ、何故か恐ろしい様な威圧、いや、ただの恐ろしさが、周囲に広がっていく。
加えて思い返される、先ほどの猫車の吹き飛び様。

さて、と、王貴の言葉が止まり、同時に男達が微動する。
びくついた様に。
その様子を見ながら、少女は微笑んだ。
花が咲いたような今日一番の笑顔で、言った。

「自己紹介が遅れました。天祥学園生徒会長、帝人王貴です」

そして。

「謝り方、知ってるかな」

周辺まで、空気が止まる。
まるで氷付けにあったかのようだったと、後に語られる。
そして、沈黙の後。
寒さかはたまた別の理由で震えがとまらない様子の彼らは、打ち付けるように地に頭をつけた。
その姿はさながら「知ってます」と言うことを体で表現しているかのように。

「あ、九郎、亜丞。いたの」

近くにいた事務員に男達のことを任せて。
何事も無かった様にすたすたと歩きながら、王貴はそう言った。
先ほどと変わらぬ、穏やかな様子で。

「せっかく人がのんびり散歩してたのに、酷いよね」
「ほんとにな」

あっけからんと笑う王貴に、亜丞が少し疲れたように呟いた。
彼からしても、王貴の機嫌をわざわざ損ねた男達の存在は嫌なものであった。

「で、王貴。どうしたんだ、それ」
「猫車、知らない？学校には普通にあるものだよ」
（そんな使いかたは初めて見たけどな）

王貴は倒れた猫車をかかえながら、微笑んだ。

クラスマッチ（春）　1

「ガラスは弁償、休みのうちに業者が来て直してくれるって」
「そう、よかった」

そう言って、王貴はソファに座り優雅にお茶を飲んだ。

ここは学校なのだが。

もはや言う気にもならず、九郎はため息を吐いた。

「九郎、ため息は幸せを吐き出すんだぞ」
「……そう」

亜丞に差し出された菓子を口に含みながら、九郎は笑った。

「そうそう、今日ここに来た目的なんだけど」
「……あったのか」
「もちろん」

てっきり王貴の気まぐれかと思っていた九郎と亜丞は少し驚

いた顔になる。
世乃も聞かされたのは遅かったのか、苦笑いを浮かべる。

「ほら、クラスマッチだよ」
「……ああ、そういえば」

天祥学園では、春と秋の二度、クラスマッチがある。
学年別に競技を行い、一位のクラスには褒美もあるため、生徒のやる気も大きい。

「それで、その事前打ち合わせか」
「そうだよ。世乃」

王貴の言葉に、世乃は一枚の紙を取り出して読み上げる。

「今回の競技は、”しっぽとりゲーム”」

間。

「まあ無難だな」
「去年に比べたらなあ」

思い返される昨年。
鬼チームとその他の複数チームによって行われた”変則缶けり”。
缶を蹴ったチームが勝ち、誰も蹴れなかった場合には鬼チームが勝ち、となっていた。

が。

缶が増えたり減ったりする減少が起き、もはや駆け回り逃げ回り走り回り回り回っている状態。
最終的に当時の生徒会により事が治められたことは、記憶に鮮明である。

普通のスポーツにすれば、というのは、禁句である。
学園中が、この行事を楽しみにしているのだから。
作戦を組んでまで優勝を狙うまで、本気で取り組むほどに。

プリントを受け取り、見ていた九郎が呟く。

「……ルールもしっかり出来てる。これで十分なんじゃないか？」
「ところが、そうもいかないんだよ」
「と、言うと？」
「あ、ハンデだな？」

亜丞が思いついてそう言うと、王貴はうなづいた。

一応団体戦であるので、しっぽを取った数ではなく、最後に残れるかどうかである。

「缶けりより個人戦になりそうだから、せめて運動部にはハンデがいるって言われて」

「具体的には、しっぽの長さくらいしか思いつかなくて」

王貴の持つ紐は、片方が長くもう一方は短くなっている。

確かに、長ければしっぽはとられやすいし、そうなると気にして動きも鈍くなるはずである。

「で、それだけじゃ心もとないので、生徒会の出番だよ」

生徒会はクラスマッチには参加せず、主に審判などの仕事を行う。

「審判で手助けするのか？」

「それは当然の事として、はいこれ」

そう言って、九郎に渡されたのは。

「……しっぽ？」

「しっぽ」

「しっぽ……」

とりあえず受け取って、どうしたらいいものかと首を傾げる。
あわせて首をかしげながら、王貴は微笑んだ。

「題して！生徒会チャンスターイム！で、どうかな？」

……

（凄く明るい響きの中に恐ろしさが見え隠れしているっ……！）

しっぽを握り締め、九郎は叫びそうになるのを堪えた。
王貴はいまだ、有無を言わせぬ微笑を携えている。
（あ、これは駄目だな）

「つまり、途中復活制度か」
「うん。不利なチームの脱落者が、もう一回参加できるように」
「……俺がしっぽをもつ意味は？」
「もちろん、脱落者から奪われないように！」

つまりは、逃げ回れ、と。
競技管理をしながら逃げ回るのは、おそらくだが大変だろう。

「全員対応してたら大変だから、ある一定時間で下位だったクラスに限定はするけどね」
「それでもきついだろうな」
「もしかして、全員やるの？」

運動神経に自信がない世乃が不安そうに尋ねる。

「人数的にそうなるかな」
「うう……」

生徒会の人数は、クラス人数と比べればもちろん少ない。
まだやったわけでもないのに、既に疲れた顔で世乃はうなだれる。
しっぽを受け取りながら、亜丞はその頭を軽くぽんと叩いた。

「大丈夫大丈夫、危なくなったらしっぽ投げて逃げろよ」
「危ないって何」
「いざとなったら大声を上げるんだぞ」
「いざって何！！？」

クラスマッチまで、あと五日。

クラスマッチ（春）　2

「それで元気が無いわけか」
「そんなに分かりやすい？」
「まあ、私が分かる程度には」

パックから伸びたストローを加えながら、希雪はそう言った。
向かい合わせで座っていた世乃は、小さく息をつく。

「だって、亜丞君が変なこと言うから」
「まあ、あながち間違いじゃないと思うけど」

クラスマッチでは、もはや学校は戦場と化す。
色々な意味で、危ないのは危ない。

「それに」
「それに？」
「……まあ、それはおいといて」
「？」

じっと、希雪は世乃を見つめる。
不思議そうに首を傾げる世乃に、手を伸ばして頭を撫でた。

「？？」
「で、今年は？優勝景品」
「夏休みの宿題一つ免除」

瞬時に、周囲の空気がざわめく。
夏休み。
今をときめく若者にとってのオアシス、夏休みを更に楽園にしてくれるというではないか。

「この前の模試、天祥（うち）の成績が良かったから、先生も奮発したらしいの」
「これは激戦になるな……」
「うん……」

「何だ、疲れた顔して」

「！！？」
「和氏、びっくりしたー」
「あ、悪い」

ベランダにいた高良和氏は、窓から乗り出していた体を少し引く。

「！あ、あいつは！？あいつも一緒じゃないだろうな！？」

「一緒じゃないぞ」
「き、希雪……」

あたりを見渡しながら、希雪は安堵した。
顔は青ざめ、冷や汗までかいている。

（（そこまで嫌か……））

希雪の怯えの対象人物を思い、二人は苦笑いを浮かべた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

昼休み、賑わう教室の中。
一人だけ、静かに欠伸をする。

「亜丞」
「ぁー……ん、王子様か」
「呼び方」
「悪い悪い、で、どうした？王次郎」

笑いながら、亜丞は振り返る。
倉石王次郎は、にこやかに微笑んだ。
王子、という言葉が似合う、爽やかさで。

「これ、借りたままだった」
「ああ、忘れてた」

差し出された本を受け取る。

「いつものことだけど、眠そうだな」
「まあな」
「もう時期クラスマッチもあるし、何かと忙しいんじゃないか？」
「あー、それもあるな」

審判に加えて、敗者復活のためのイケニエである。
面倒では有るが、簡単に捕まる気は無いので、頑張らなくてはいけない。

しかし、一番大変なのは恐らく。

「世乃のフォローには回ったほうがいいな……」
「？」

「人気者も大変だ、ってこと。お前なら分かるだろ」

分かっていない顔で首をかしげた、学園で”王子”と称される友人に、亜丞はため息を吐いた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「大丈夫なのか？」

「大丈夫だよ、世乃ならうまく立ち回れるし、いざとなったら私達や希雪もいるから」

「そっちじゃなくて」

笑顔で答える王貴を遮り、九郎は尋ねる。

「王貴が」

「……大丈夫だよ、その日は調子がいい予定だから」

無茶苦茶を、さらりと言う。
九郎はため息をついた。
諦めたように、しかし笑顔で。

「無理そうだったら大人しくしてろよ？」
「そうだね、吐血したら」
「王貴の場合吐血は特技なので無理には入りません」
「……ち」

クラスマッチまで、あと三日。

クラスマッチ（春）　3

学内を縦横無尽に駆け巡る学生達。
ゆらゆらと、その後ろについて回る、しっぽ。
その光景を異様に感じるものは、少なくともこの学園内には居なかった。

ピリリリリリリリリリ

「そこの生徒！階段は取り合い禁止区域ですよ？」
「す、すみません！」
「はい、警告1、と」

速やかに、警告を受けた生徒にステッカーを貼る。

「3つで退場だからなー」

そして、九郎は移動する生徒の背中にそうなげかけた。

「さすがに暴挙に出るような人はいないみたいね」
（そりゃあ、暴挙に出たら暴挙が返ってくるからなー）

王貴はにこりと微笑む。
手には警告用に彼女専用スピーカーを持っている。
ちなみに、他の審判はホイッスルを装備している。

「……1年の復活タイム、もう終わったな」
「じゃあ慧斗たちが戻ってくるね」
「交代で亜丞達が2年復活タイムに入ったか……」
「大丈夫、この様子なら無茶な行動に出る人はいないでしょ」
「いや……世乃と亜丞だろ？2年の担当って」
「？うん」

「明らかに世乃の方が捕まえられる確立が高いだろ？」
「……あ」

東校舎、敗者復活区域。

「「「待てええええええええええ！！」」」
「い、や、です！！」

世乃はくるりと方向転換し、廊下を駆け抜けた。
その後ろで、しっぽがくるりと揺れる。

そしてその後を、大勢の生徒が駆け足で追いかける。

（何で、こんなに、多いの！？）

世乃は走りながら泣きそうなほどに焦っていた。
追いかけてくる人数は、思っていたよりも多い。
元から世乃を追いかけようとしていた人物。
更に、本気で復活にかけているため、確立の高いほうに賭けた人物。

それらが一気に世乃を追いかけているのだから、当然である。
もちろん、本人が知る由はないが。

「いた！」
「！！」

世乃が走る方向に、クラスメイトの姿が見える。

（あ）

（同じクラスの人にわざと捕まれば……！）

世乃のクラスが勝利に近づき、加えて安全になる。

「……」

世乃はクラスメイトに捕まる寸前で身をかわし、そのまま駆け抜けた。

「それはやっぱり駄目っ！！」

「……馬鹿真面目」

上から眺めていた亜丞は、生徒会として仕事を全うする少女にそう呟いた。

一通り逃げおおせて様子を見に来たが、思っていた通りの出来事に苦笑いが浮かぶ。

ちらりと時計を見て、残り時間を確認し。

「さて……そろそろ助けに行くか」

「も、もう……無理……」

時間はあと少し。

しかし、もう体力が持たなくなり始めていた。

「世乃！」

「！亜丞君……！？」

声のしたほうには、亜丞の姿。

その後ろに階段（安全地帯）が見える。

世乃は気力でそこまで走った。

「下にも何人かいるから、とりあえず階段で休んで「きゃあ！」世乃！？」

ふらつき始めていた足は、段差に耐えられなかったようだ。

階段にたどり着いた世乃は、亜丞の横を倒れるように通り過ぎていく。

まっさかさまに。

西校舎の一角。

「……ああ、心配だ！」

そういいながら、希雪は華麗にしっぽを取りさった。

「わざとでもしっぽとられればよかったじゃないすか」

「それはそれで嫌だ！」

気だるそうに呟かれた言葉に、希雪は言い返す。

気だるそうな声の主、慧斗は、ため息を吐いた。

「じゃあ愚痴るのやめてください、こっちも疲れてるんで」

「……へえ、本気で頑張ったんだ、仕事」

いつだって何事も程ほどにやっている慧斗にしては珍しい、

と、思わず感嘆のため息がでた。
それに対し、慧斗は疲れきったため息を吐く。

「一応生徒会の仕事だし……捕まる方がよっぽど面倒」
「……ああ」

理由が分かり、希雪は納得してうなづいた。

今回のクラスマッチ、頑張っているのは何も優勝目当てだけではない。
公式に、誰かを追い回すことができる、という点でも、やる気を出している者たちがいた。

「きゆ先輩も面倒なことになってると思ってたんすけど」
「奴目当ての女の子達のおかげで大助かりしたよ」
「あー、一応モテますからね凌先輩も」
「倉石なんて凄かったぞ。嵐が駆け抜けたかと思った」
「それで早々と脱落しちゃったんすね、王子先輩」

「……ああ！余計に心配になってきた」
「せの先輩も、人気者ですからねー」

東校舎の方向を見つめ、慧斗は欠伸をした。

「世乃！平気か！？」
「……う、ん……大丈、夫？」
亜丞の声になんとか答える。
階段を落ちたというのに、不思議と体に痛みはあまりなかった。
そして、不思議と柔らかな感覚。
ゆっくりと、目を開く。
目の前にあるのは、床ではなかった。

「大丈夫？」
「……」
「前原さん？」
世乃は固まったかのように黙ったまま。
不思議に思い、王次郎は世乃の目の前で手をひらひらさせてみる。
「くくくくら、いし、く……！」
「ま、前原さん！？」

世乃はショートしたかのように気絶した。
階段から落ちた先の、王次郎の上で。
亜丞はほっとしながらも、苦笑いを含んだため息を吐いた。

「……そろそろ交代かな」

王貴が時計を見上げてそう言ったそのとき。
タイミングを計ったかのように、廊下の端に亜丞が現れた。

「おつかれさま、どうだった？」
「取られなかった。よかったのか？」
「復活ゲームには、早々に退散した人たちの延長戦みたいな意味もこめてるから」
「なるほど」

それなら十分だ、と、亜丞は首からホイッスルを下げた。

「……世乃は？」
「あー、保健室」

まさか、と驚く二人に、亜丞は笑いながら言い加えた。

「ちょっと疲れて気絶しただけだ」
「そっか……少し無理させちゃったかな」
「……いや、本人は多分幸せだったと思うぞ」
「へ？」
「とにかく、無事に終わったってこと。ほら、次行って来い」
王貴と九郎の肩に手を回し、亜丞は笑ってそう言った。
二人も笑って答えた。
「「行ってきます」」

「で、来たわけなんですが」
「どうしているんでしょうね……」
「どうして、だなんて」
そう言うと、肩に羽織ったジャージをはためかせて微笑む。
若干疲れた顔をした九郎と、相変わらず微笑む王貴に向かい。
「嬉しいこと言ってくれるじゃないか」
「「ですよね」」
”元生徒会長”御堂司春は、二人の思っていた通りの言葉を返した。

呆れながらも、九郎は尋ねた。

「で、本当なんでいるんですか」

「もちろんしっぽを取られてしまったからだよ」

「いえ、そうではなくて。どういった理由で取られようと思ったのですか？」

九郎の質問に付け加えて、王貴が尋ねる。

「面白そうだから」

「「ですよね」」

「それに俺がいなくてもうちのクラスは優秀だから」

「ああ！……押し付けましたね」

思い浮かぶ、元生徒会の先輩のストレスをためた姿。

「すっごく大変そうだったよ！」

「嬉しそうに言わないでください」

「さあ、そろそろお喋りは終わりだ」

そう言って、司春はぱん、と手を鳴らす。

「楽しみにしてたんだ。だから、二人にも頑張ってもらうよ」

一年のときから生徒会に所属していた司春は、一般にクラスマッチに参加するのはこれが最初。

わざわざでないと捕まることなど有りえない人物が、今目の前に立ちはだかっている。

「これは本当に、頑張らないと駄目ね」
「全くだ」
王貴が微笑み、九郎はため息を吐いた。
そして同時に、３人は駆け出した。

クラスマッチ（春）　４（後書き）

どうでもいいことですが、全員体操服（ジャージ）です。
王貴・慧斗・世乃・希雪→半そで半パンにジャージ上を羽織る
九郎・亜丞・王次郎→半そでに長ズボン、上に長ジャージを羽織る

「さすがだね、一見病弱可憐な少女とは思えない動きだよ」
「先輩こそ、いろんな意味で常識はずれです、ねっ」

「はは、褒めても何もないよ？」
「すみません、言葉を間違えたようです」
「それにしても、他を全て九郎君に任せて一対一で来るとは。下克上かい？」
「嫌です先輩、下克上は下から上にするものですよ？」
「あれ、俺先輩だよね？上じゃないんだ？」
「先輩は斜め右辺りです」
「それは……どこ？」

楽しげに会話を交わしながら、二人は走り続けていた。
時折、跳びながら。

「さて、そろそろ逃げられないよ？」
「！」

そこは、壁で囲まれた廊下の端。

「制限時間まであと少し……頑張ったけど、ここまでだよ」
「あら、”これから”の間違いでは？」

そう言うと、王貴は微笑みながら抱えた。
消火器を。

「……それの使い方知ってる？」
「消すんですよね」
「何を！？でも何か楽しそう！」
「ですよ、ね！」

勢いをつけて、王貴はそのまま司春に向けて駆け出した。

そして、通り過ぎた。

「え、殴らないの！？」
「殴りませんよ！！？」

そのまま通り過ぎる算段だったのだが、思わず返答してしまった。

司春はその隙を逃さなかった。

「あ！」
「捕まえた。まだまだ、甘いね」
「……！」

しっぽをとられるその直前。
王貴が不意に咳きをした。

廊下に、赤い染み。

「王貴！？……え」

「お疲れ様でした」

王貴のねぎらいの言葉に、片手だけ挙げて九郎は答える。
息を切らせながらも、ちゃんとしっぽをつけて。

「そろそろ競技も終わるから、戻りましょう」
「ああ……先輩は？」
「先程沢城先輩が引き取りにこられました」
「……了解」

引きずられていったであろう姿を思い浮かべ、九郎は立ち上がった。
ふと、王貴に手を伸ばす。

「大丈夫だったみたいだな」
「……特技がありますから」

微笑む王貴の頭を撫でてあげながら、九郎は笑った。
二つのしっぽが、ゆらりと揺れていた。

数分前。

「王貴！？……え」

「甘いですよ、先輩？」

「……やられた」

思わず手を離した司春から、王貴が距離をとる。

口元を拭いながら、王貴は微笑んだ。

終了の合図が、鳴り響く。

「……大丈夫なんだ？」

「はい、これも特技ですから」

「それは凄いね、誰にも真似できないや」

「先輩なら、特技出血、にできそうですけどね」

「……その手があるか」

「……ですよね」

結局、司春は復活しなかったものの、彼の言ったとおりに彼のクラスは優勝していた。

恐らく、彼により全てを押し付けられた”彼女”の功績でだろう。

「相変わらずだったな、先輩」
「本当。人を困らせるのが好きな人だよね」
困らせられるのも好きなくせに、と。
二人は顔を見合わせて笑った。

衣替え

衣替え。
季節の変化にあわせて、服装を変化させる。
天祥学園にも、その季節がやってきた。

「何だかにぎやかね」
「そうだな」

門の辺りがいつもより騒がしいのを見て、王貴は首をかしげ、九郎はうなづく。

「風紀委員だ」

「おはよう河野君」
「おはよう」
「風紀……ああ、衣替えか」

後ろから現れたクラスメイトを振り返り。
九郎は思い出したように言って、ため息をついた。

「それはまた……騒がしいわけだ」

「そこの生徒、ネクタイが乱れている。直すか外すかどちら

かにしろ！」

「そこ！そのシャツは指定違反だ！」

「止まれ！貴様、違反をしておきながら逃げるとはいい度胸だな」

「元気ね、真幸」

「というか、熱いな……あいかわらず」

天祥学園風紀委員長、東堂真幸。

学園一生真面目で熱いといわれている。

元々規則は緩めの学園ではあるのだが、その分、守らなければいけないとされるのだ。

一人、また一人、門で捕まる生徒。

「まあ、大きく違反してなければ問題無いな」

「そうだな……と、王貴」

「何？」

「ネクタイ」

王貴は、”リボン結び”にした自分のネクタイを見た。

はあ、と息をついて九郎はそれに手をかける。

「生徒会長が引っかかるわけにはいかないだろ」
「そうね」
周囲の視線は気にせずに、九郎は王貴のネクタイを結びなおした。
隣にいるクラスメイトは、既に慣れたのか動じることは無かった。
が、それでも少しは思うところがあるのか。
「よし、行くか」
「……そうだな」
「？修二、どうかしたのか」
「なんでもない。行くぞ」
歩き出すクラスメイトを、不思議そうに二人は見つめた。

「！　そこ、出てこい！」
真幸が投げたペンが、木の中に吸い込まれるように飛んでいった。
そしてそこから、人が落ちる。

「何すんだ！」
「高良か……相変わらずだらしの無い格好だな」
「別にいいだろ、動きやすいんだよ」
「残念ながら駄目だ、ベルトはするのが規則だからな」
「規則規則とお堅い頭しやがって……」
「文句があるのなら堂々とすればいい、それをこそこそと……」

「「やるのかっ！！？」」

（（（また始まった……））））

周囲の風紀委員や一般生徒何人かはそう思った。
高良和氏と東堂真幸の争いは、今に始まったことではない。
しかも、大方の理由は”何となく”反りがあわないため。

「和氏ー先いってるからなー」

遠くから、凌が軽く手を振って通り過ぎた。

「いやしかし、夏服はいいよね。薄着だし」
「希雪……」

友人の言葉に呆れながら、世乃はため息をついた。

「で、世乃はいつ上着脱ぐの？」
「……もう少し暑くなってきたらかな。希雪は？」
「ぎりぎりかな。日焼けするの嫌だし」
「あ、なら許可とる？」
「許可？」

「許可があれば、真夏だろうと上着オッケーなんだよ」
「そういわれると、帝人は年中上着を羽織ってるな」
「日差しとかクーラー苦手だからね。おはよう」
教室でクラスメイトに挨拶を返しながら、王貴は答えた。
「でも、許可を取るのも大変じゃないの？」
「……いや、それは……」
クラスメイトに尋ねられ、九郎はやや苦笑いを浮かべる。
そこに、予鈴が鳴り響た。
席に着き、ほっとしたように息をつく。
そして、誰にも聞こえないように呟いた。
「許可も何も、生徒会長権限だから、な……」

テスト週間

漢字で言うと、余計に難しく感じるのは何故だろう。
教師から告げられたその言葉は、生徒達の空気を少し重くした。

反対に、別の―恐らく階段を挟んで隣のクラスからは明るい声が聞こえてきた。
騒がしいともいえるその声々は、大きな一喝とともにぴたりと止まった。

「各科目範囲の発表は各自で確認しておくように」

先程の声など全く聞こえていないように。
それだけ告げると、開いていた教科書を閉じた。

「鉄仮面……」
「そう？曾我先生だって表情豊かじゃない」

王貴の言葉に、九郎は思い出しながら考えてみる。
眉間にしわを寄せた数学教師の、表情。

「あー……まあ、確かに」
「でしょう？」

「主に怒り方面に偏ってるけどな」

「……向こうの先生も、今頃そんな感じじゃないかな」

「……と言うわけで、皆しっかり頑張るように」

はーい、と間延びした返事。

後ろの方の席では、頭を抱え込むように俯いた生徒の姿。

「和氏君が悪い」

「右に同じく」

「同意見」

「お前ら……」

友人達の笑顔の冷たい言葉に、俯いたまま和氏は小さく唸る。

もっとも、自業自得でもあるのだが。

騒ぎを一喝する中で、立ち上がっていた和氏に向かいチョークが投げられたのだ。

「甲斐田先生、チョーク投げの制度が増してきたなあ」

「それはほら、和氏がいるから」

「どういう意味だ！」

思わず大きな声を出した和氏の下に、白い物体が高速で飛ん

できた。
見事に当たったそれは、起き上がった和氏を見事に”しずめた”。
「……こういう意味だよ」
凌ぐは呆れたように笑いながらため息をついた。

「と言うわけなので助けてください世乃さん！！」
「……何が、と言うわけ、なのかは知らないけど……はあ」
目の前で、手を合わせて懇願する和氏。
世乃は笑うことなく呆れながらため息をついた。
その場に居合わせた亜丞が和氏についてきた凌に尋ねる。
「和氏、そこまで成績わるかったっけか？」
「その時の調子にもよるけど、部活で赤点は絶対駄目なんだよ」
「なるほど」
世乃は苦笑いを浮かべて和氏に向き合った。

「数学だったらいいよ。けど、他は自分でね」
「十分だ、助かる……！」
「いいよ、しばらく生徒会も無いし」
「俺も勉強会するかなー」
「亜丞、十分成績いいだろ」
やや恨むような視線で、和氏は亜丞を見た。
「馬鹿、今成績良くったって勉強しなくて言い訳じゃないだろ」
「頭いい人ってのはちゃんと勉強してるからなんだよ」
「……そう、だよね……」
亜丞と凌の言葉に、何故か世乃が少し俯く。
「頭いい人は勉強するんだから……追いつくわけないもんね……」
「……」
疑問に思い亜丞と凌は首を傾げる。
理解した和氏は、世乃を元気付けるように頭に手をやり、軽く撫でた。

「っくし！！」
「また誰かが噂してるのかな、さすがだね」
「嬉しくないから」

そういいつつ、王次郎は棚の高い位置から取った王貴に本を手渡した。

「ありがとう」
「どういたしまして。このくらいだったら、いつでも」

そう言うと、王次郎は爽やかに微笑む。
この当たり前でさりげない優しさも、王子である所以なのだろうと、王貴は思った。

「それに、踏み台に乗ってふらふらしてるのを見たら、ほっとけないしね」
「だって、九郎も亜丞もいないんだもん」

そう言うと、王貴はやや不機嫌そうな表情を浮かべる。
それをみて、王次郎はまた笑う。

「王次郎も本を借りに来たの？それとも、勉強？」
「借りに来たほうだよ。図書室で勉強するの苦手なんだ」
「あ、分かる……と、時間取らせてごめんね、ありがとう」
「ううん、王貴ちゃんも勉強がんばって」
「王次郎もね……なんて、言うまでもないのかな？」

そう言ってから、王貴は学年一位の人物に向けて微笑んだ。

「そんなことないよ。ありがとう」
「うん、それじゃあ」

それぞれが、テストに向けて準備を始める。
二週間後を笑顔で迎えるためにも。

テスト準備

「……！」
「あ、こら王貴！投げるな！」
教科書を放った王貴の額を亜丞がつついた。
が、何時もの明るさはそこには無く。
うなだれるように、王貴は机にうつぶせた。

「……うう」
「苦手科目を残しておきたくないって言ったのは王貴だろ」
「化学というのは日進月歩、日々移り変わるものであって、その時だけを学んでもダメだと思う」
「もっともらしいこと言ってもダーメ」
「うう……」
「一旦休憩するかー……何か飲むか？」
「お茶。熱いの」
「ちょっとまてよ、冷蔵庫の中確認してくる」

「……お前ら、ここどこだか分かってるよな」
「「九郎の家」」
顔を見合わせて同時に言い放った王貴と亜丞に、九郎はため息をついた。

「大体なんで俺の家で……」

お茶を配りながら、九郎は呟く。

色々といいながらも用意するあたりが九郎だ、と亜丞は思った。

「王貴は丁度薬を受け取りに来る用事があって、俺のところは無理だから」

「亜丞の家、今日も忙しいの？」

「ああ、今週一杯は予約詰めだそうだ」

そう言いながら亜丞は王貴の放った教科書を机に戻した。

王貴は微笑みながらそれを自分の目の前からずらす。

「……王貴」

「……国語にしない？亜丞は国語の勉強しないといけないんでしょ？」

「国語なら九郎とやる。から、王貴は化学な」

「うっかり平均以下になりたくないんだろ？」

九郎に言われて言葉に詰まる。

王貴の成績は悪くはない。

寧ろ、学年で１０位前後には確実に居るほど良い。

しかし、王貴は生徒会長。

できれば他生徒の手本として、平均以上の成績は保っていたいのだ。

ただ、何にも負けない彼女にも苦手な物はあるということで。

大人しく教科書を手に取った王貴を見て、二人は小さく笑った。

「やろうと思えばできるんだからな、まったく……」

「さて、こっちも始めるか。九郎、頼むぞ」

「はいはい。俺も苦手科目つぶしとかなきゃいけないんだけどな」

「世乃……は和氏で手一杯か……王次郎にでも頼んどいてやるよ」

ファミレスの一角。

世乃はシャープペンシルを持って、和氏を指差した。

「とりあえず、まずは問題演習からね」

「……俺、公式覚えてないのもあるけど」

ストローを加えながら、和氏は世乃を見た。

そのストローを世乃は取り上げてコップに戻した。

「問題をといて、公式を使い方ごと覚えるの」

「なるほど」

「和氏、計算は速いほうだし直感はあるから、後は問題を解いてなれる事」

そう言うと、世乃は自分の飲み物に口をつけた。

そして、自身の勉強分のノートを取り出す。

「頑張るなー……”今度も”」
「……頑張るよ」
「……デザートも、奢るな」

世乃が頑張る理由のひとつを、和氏も知っている。
知っているから、応援しようとも思う。

ついでに自分もケーキを頼もうと考えながら、和氏は目の前の数字にむかうことにした。

「まったく……」

ふう、とため息をつきながら、手元のプリントを束ねる。
そこに、さっと湯飲みに入ったお茶が差し出された。

「お疲れ様、甲斐田先生」
「雨宮先生、ありがとうございます」
「今日も賑やかだったようですね」
「はは……」

苦笑いを浮かべながら、差し出されたお茶を受け取る。

「是非、そうしてもらいたい」

職員室の扉を開き入ってきた人物は、淡々と言い放った。

「曾我先生」

「お疲れ様です、お茶、いかがです？」

「結構だ」

雨宮の申し出を断り、自分の席へとつく。

「……すみません、本当に」

「……」

トーンを落として謝る甲斐田に、曾我は無言で答えた。

怒っているのではない。

別に甲斐田が悪いと思っているわけではないし、曾我自身も馴れてはいることなのだ。

機嫌が悪く見えるのは、彼の元来の性格と表情の所為である。

「せめてテスト期間くらいは、静かになるといいんですが……」

「ならんだろう」

「……」

返す言葉も無く、甲斐田はお茶を口に含んだ。

「テスト期間ですか……大変ですけど、頑張ってください」

今回はテストがない家庭科教師である雨宮はそう言って、にこりと微笑んだ。

テスト後日

（世乃マジ感謝っ……！！）

自分にとっては十分すぎる点数に、テスト用紙を握り締め和氏は心で叫んだ。

答案用紙をを渡す際の曾我が、いつもこれなら、という目も気にしない。

また、今回は平均点も良かったらしく、曽我の機嫌もそんなに悪くは無かった。

ように見えた。おそらく。

「はー、どやされずにすむ……」

「部活か？」

「夏のこの時期に練習禁止とか……考えるだけで怖い」

「世乃ちゃんさまさま、だね」

「本当にな……何時もの事ながら頭が上がらないよ」

別の教室。

「せのー、とりあえず頭を上げろ」

机にうつぶせた世乃を、希雪がゆする。
手には、先程帰ってきた答案用紙。
彼女にしては珍しく、ぎりぎり平均点である。
もっとも、他の科目を考えれば、痛手でもないのだが。
ただ、彼女の目標は、今回も果たせそうに無い。
「きゅ……私はもうだめかもしれない……」
「苦手科目くらい、落としたってしかたないでしょ」
「……今回は何時もより頑張ったのに……」
いつになく頑張りすぎると、結果が反比例する。
そういうこともある、と希雪は思ったが、言わずにただ世乃の頭に手をやった。

そしてまた別の教室。

「王次郎、九郎が感謝してたぞ。何時もよりいい点が取れたってな」
「それはよかった。俺も社会のコツとか教えてもらえたし」
「それ以上点数とってどうするんだよ……」
「……まあ、いろいろと」
珍しく、ぼかすように笑った王次郎を見て、亜丞は少し首を傾げる。
王次郎は、何時もの様に微笑んでいるだけだった。

少し離れて、生徒会室。

「さすが真幸、相変わらず完璧だね」
「これで夏期休暇中の取り決めは終了だな」
「うん、次は体育祭だからね」
「体育委員か……まあ、これに関してはちゃんとするだろうな」

はあ、と疲れたようなため息を真幸はついた。
それをみて、王貴は微笑む。

「おつかれさま。テストとも重なってたけど、疲れたでしょ？」

「このくらい問題無い」
「まあそういわずに、お茶でもどう？丁度おいしい和菓子があるんだけど」
「学校だぞ、というかお前風紀委員の前で堂々と……」
「甘いもの、好きだよね？」
「……」
「……」
「……」
「……おいしいって評判のお店の、水羊羹なんだけどなあ」
「……いただこう」
「うん」

微笑みながら、王貴は立ち上がった。

「今回のテストは、皆中々頑張ってた様だね」

「ええ、甲斐田先生も曾我先生もご機嫌でしたから。それより」

「うん？」

「いいんですか？自室を抜け出して家庭科室でお茶なんて飲んでて」

「構わんよ、こっそりとだから誰も気づいてないさ」

ニコニコと微笑む人物に、雨宮は笑いながら小さく息をついた。

「もう……ちゃんと仕事しないとだめですよ、学長」

「わかってるよ」

「本当かしら……お菓子まで持参して」

皿の上で、水羊羹が冷たく揺れていた。

体操服と水鉄砲

「……王貴さん王貴さん」
「何？」
「これ」

九郎は一枚の紙をひらりと見せる。
王貴は動かず顔だけを近づけてそれを見た。

「委員会の必要経費が、どうかした？」

無言で九郎が指差した部分を、注意深く見ていく。
それは、体育委員会の経費請求のプリント。
目的部分に、”プール掃除の為”と書かれている。
そういえばそんな季節か、と思いながら、ふと一点に目を留める。

水鉄砲、と、書かれていた。

「なんだか楽しそうな気配がする……！」

真剣な顔で立ち上がった王貴を見て。
しまった、と思いつつも九郎はもう一度かかれた文字を見た。

（こういうことか……っ）

広がる光景を見て、思わず出そうな声を抑える。

磨かれて泡がついたプールの壁と、水浸しの地べた。

繰り広げられる銃撃戦（ただし、水鉄砲）。

「どういうことなの……？」

「あ、風子ー」

「王貴？それに上條君も。どうしたの？」

「そっちこそどうしたの、だよ……」

体育委員長厳木風子は、マシンガンの様な水鉄砲を抱えていた。

肩にジャージを羽織り、裸足という格好なのだが、何故だか様になっている。

似合うからか、元がいいからなのかは不明だが。

「掃除を迅速に終わらせるには楽しむのが一番、ということよ」

確かに、プールの状態は後は水で流すだけ、の用である。

既に周囲は綺麗に掃除がされた後だった。

ただ。

「……で、この戦場はいつから？」

「一時間ほど前かな」

「余計に時間掛かってるんじゃん！？」

「体育委員たるもの、何事にも本気でね」

天祥学園の体育系の部活、行事を仕切る体育委員会。

委員長のカリスマ性もあってか、団結力は強い。

また、体育委員なだけあり、全員運動神経も良い。

彼らの特徴を上げるとすれば、”全力全快”と言ったところか。

何をするにも熱を込めて本気で取り掛かるのだ。

その為には、多少の無茶苦茶も辞さない。

「委員長！お願いします！」

その声が聞こえたかと思うと。

返事もせずに、風子は素早くプール中央付近へと移動する。

水浸しであることを利用し、滑りながら軽やかに動き、そして。

「わ！」

「うぉ！？」

白い鉢巻を巻いていた体育委員二人に、水を浴びせた。

やられた証に、二人は鉢巻を外す。

「うーん、だいぶ形勢も傾いてきたわね……」
そう呟いたかと思うと、風子はあたりを見渡した。
そして、一人うなづくと。
「！」
投げられた水鉄砲と白い鉢巻を、王貴はキャッチした。
投げた風子のほうを見ると、にこりと微笑んで。
「ちょっと手伝ってくれない？」
「うん、いいよ」
一瞬の交渉の後、互いに笑みを向け合った後。
瞬時に表情を真剣な物へと切り替えた。

「……」
「九郎君？」
「世乃か」
「生徒会室にいないと思ったら、何してるの？」
フェンス越し、少し低い位置から、世乃が見上げて尋ねた。
姿を探していたのか、少し息を切らせて。
「あー、うん。いろいろと……それより、タオル用意しておいてくれないか？」
「タオル？」
「そ、タオル。あと、できれば温かい飲み物も」

彼女が明日、風邪を引きませんように。
苦笑いとともに、九郎はそう願った。

髪と乙女

「っくしゅ」

小さなくしゃみが、部屋の空気をかすかに震えさせる。

「王貴ちゃん、大丈夫？」

「平気よ、ありがとう」

季節に合わないホットココアを差し出して、世乃は心配そうに尋ねる。

受け取りながら、頭にタオルをかぶった王貴は微笑んだ。

結局、あの後一時間ほど、”プール掃除”は続いたわけで。

王貴と九郎が生徒会室に戻ってきたときは、ずぶ濡れに近い状態だった。

もっとも、九郎の方は最後の水の一斉放射の二次被害を受けただけなのだが。

「九郎君も飲む？」

「や、俺はいいよ。悪いな世乃」

軽く手を挙げて断ると、九郎は肩にタオルをかけてため息を

吐いた。

「王貴も髪ちゃんとかわかせよ」

「そうしたいのはしたいんだけど……」

困ったように笑う王貴を見て、不思議に思い九郎は首を傾げる。

気がついたのは、世乃。

「もしかして、ドライヤー？」

「うん、さすがに生徒会室には置いて無いから」

コーヒーメーカーやら冷蔵庫やらレンジやらは置いて在るのに。

思いつつも口に出さずに、また九郎は不思議そうな顔をした。

「タオルじゃ駄目なのか？」

「駄目って訳じゃないけど……時間掛かるもの」

「王貴ちゃん髪長いから……それに痛むからね。私借りてくるよ」

多分更衣室あたりにあるだろう、と言って、世乃は立ち上がり部屋を出た。

王貴は見送りながら、タオルで髪をくるむようにしていた。

「まあ、乾かさないままでも痛むからね」

「なるほど、風邪とかじゃなくてそっちの心配もあるのか」

「女の子だからね」

そういわれて、九郎は納得しながら王貴の髪を見た。
昔から長かったのだが、確かに、いつもきちんと手入れがされていたように思える。
長いのに絡んだりはしないようだったし、いつも真っ直ぐさらりとしていた。

「うーん、少し邪魔になってきたかなあ……」
「そうだな、夏場だし少し括ったりしたほうが……」

はっとして、言葉を止める。
目の前の彼女の手先は、自分のネクタイも結べないほどに、不器用だと思い出して。

運動するときなどに一つにまとめたりはしているのは見たことが在る。
恐らくそれくらいなら出来るのだろう、ゴムで縛るだけなので。

「……いっそ切ってしまおうかなあ」
「え！」
「え？」

王貴の呟きに九郎が声を上げる。
不思議に思い王貴は九郎を見た。

「九郎？」
「いや、それは少しもったいない気がして」
「もったいないかな？」

「せっかく手入れしてそこまで綺麗に伸ばしたんだろ？」

王貴の髪にタオルを乗せて、優しくふいて乾かしながら、九郎は言った。

九郎の言ったもったいない、の言葉を小さく繰り返しながら。

王貴は笑顔で、振り返った。

「……うん、やめる。もったいないから」

「じゃあ夏場は色々結び方を試してみようかな。ね、九郎」

（やっぱり俺がやるのか……）

女子更衣室のドライヤーを一つ借りて、世乃は足早に廊下を駆けていた。

「あ」

「え」

曲がり角を曲がった直後、目の前に見えた姿を避けられずに。

ぶつかった反動で後ろに倒れそうになるが、頭に痛みを感じて思わず前のめりになる。

「痛っ」

「ちょ、大丈夫すか？」

「あ、はい大丈夫ですごめんなさい……あれ、慧斗君」

「危ないですよ、ほら」

そう言って示されたところを見ると。

世乃の髪が、慧斗の制服のボタンに引っかかってしまっていた。

「……絡まっちゃった……」

「駄目ですよ、せの先輩ぽけっとして危なっかしいのに走ったりしちゃ」

「ご、ごめんなさい」

後輩に注意され、世乃は俯いてしまう。

さりげなく失礼なことの様にも感じられたが、世乃は気づかない。

「結構絡まってますね……」

「うーん……慧斗くん、ハサミもってない？」

世乃が尋ねると、慧斗は呆れたような顔で世乃を見た。

不思議に思い世乃が尋ね返す。

「け、慧斗君？」

「まさか髪切るつもりですか」

「え……そうだけど」

呆れ顔をいっそう深くして、慧斗はため息を吐いた。
少し下を向いたまま、呟くように世乃に告げる。

「……もういいですから、そこでじっとしといてください」
「え、でも」
「いいから」

その剣幕に押され、言われるがまま、世乃は大人しく待つことにした。
慧斗は指先で、絡まった髪を丁寧に解いていく。

「髪とか、無闇に切るもんじゃないと思いますよ」
「それはそうだけど……慧斗君にも迷惑がかかってるわけだし……」

二人は現在廊下の角に立ったまま動けずにいる。
少なくとも、慧斗の時間を浪費させてしまった。

「別に、というかせの先輩は少し小心すぎです。俺後輩ですよ？」
「う、うん……えっと……頑張ります？」
「……まあ、それがせの先輩らしさですけど」

するりと、ボタンの留め具から髪が外れる。

「取れましたよ」

「ありがとう慧斗君……慧斗君？」

世乃の髪をつかんだまま、無言の慧斗を世乃が見つめる。
はあ、とため息を吐いて、慧斗はその手を離した。
こぼれた髪が、さらりと流れていく。

「髪」
「え？」
「綺麗ですね、髪」
「え……」
「だから」

「今度引っ掛けても、ハサミで切ろうとかしないでくださいね」

「もうしないってば！」

本心から呆れたように言われ、反抗するように世乃は叫んだ。

生徒会の夏休み（計画）

夏休み。
とはいっても、高校生にもなれば学業や部活やで忙しい。
気がつけば、普段と変わらず学校に来ている、ということも多い。
とはいっても、やはり休み。
皆の気がやや浮かれ気味になることも致し方ないだろう。
「だからと言って、学園内を荒らす事は一切認めませんけどね」
夏だというのに、春の精の様な微笑と冬将軍の覇気を背負って。
生徒会長帝王貴はガラスを割り正座した学生二人の前に仁王立ちしていた。
「やあ、今日も働き者だね」
「先輩方」
にこやかなその声に王貴は振り返った。
予想通りにこやかな笑顔の人物と、その隣でため息を吐いた人物。

前生徒会長である御堂司春と、前副会長の沢城六花。

「どうしたんですか？さすがに先輩に説教をするのはちょっと……」

「いや、別に用があってね……まあ、彼らと並んで正座しても構わないけどね〝っ」

「ちゃんとした用事だから、安心してね」

司春に肘打ちを食らわせながら、六花が告げる。

王貴は何時もの光景に微笑みながらうなづいた。

「海？」

「そう、先輩方からのお誘いで」

先程司春と六花から持ちかけられた話。

現生徒会と前生徒会メンバーで海に行こうという話。

王貴は生徒会室へと戻ると、九郎と亜丞に伝えた。

「まあ、私達も後半体育祭の取り決めまではお仕事も無いので」

王貴は微笑みながら手を軽く叩く。

「生徒会の夏休み、やりましょう」
「……ちゃんと計画を立ててから、な」
「世乃たちにもちゃんと聞いてからだぞ」
きらきらとした、有無を言わさないその笑顔に。
二人は仕方ない、と笑みをこぼしたのだった。

「海？」
世乃は少し驚いたように答えた。
その様子に亜丞は聞き返す。
「何だ、海嫌いなのか？」
「え、ううん。そうじゃないけど……水着買わないとなあ」
恥ずかしそうに声を小さくしながら世乃は言った。
それを聞いて、ああ、とうなづいて。
「まあ、スクール水着でも俺はいいと思うけど」
「それはちょっと」

冗談半分で言う亜丞に、世乃は苦い顔を返す。
その顔を見て、亜丞は更に笑う。
「でもまあ、それなら大丈夫だ。水着選びから皆で行くらしいから」
「皆？」
「そ。王貴も水着買うし、俺たちはまあ付き添いだな」
「それなら大丈夫かな」
「ね、買い物ついていってもいい？」
「希雪」
世乃に後ろから抱きつくように、希雪がくっついてきた。
振り返りながら世乃が尋ねる。
「二人の水着選びたいし、私も水着欲しいし」
「それは構わないと思うぞ。なんなら海も来るか？」
「生徒会水入らずでしょ？遠慮するわ。その代わり、別でプールに行く」
予定ではなく、断定で希雪は言った。
それを聞いて世乃は苦笑いを返す。
「うん、プール、行こうね」
「うん」
世乃の微笑みに、希雪の笑み。
亜丞もつられるように、笑みをこぼした。

「そういうわけだから、海に行くよ」
「どういうわけっすか……」
若干呆れた顔でため息を吐いた慧斗は、目の前の王貴の顔を見る。
きらきらと効果音をつけてもいいだろう笑顔。
「まあ、いいですけど」
「予定とか大丈夫か？」
「今のところ特に未だ無いんで平気ですよ」
尋ねる九郎に一応携帯電話で確認をしながら、慧斗は答えた。
「食べ物とか奢ってもらえそうですし」
「はは……」
「それより会長は大丈夫なんですか？」
「ん？」
「海」
海といえば強い日差しに潮風。
一応病弱な王貴の体で大丈夫なのか。
「うん、それは大丈夫」

「ちゃんと対策をしておけば、な」

はあ、とため息を吐いて九郎は王貴の頭を小突く。
それを見て、慧斗もこっそりとため息を吐いた。

「それより、そろそろ昼休み終わりですよ」
「お、じゃあまた連絡するな」
「またね慧斗」

肘を突いて手を振りながら、二人の背中を見送る。

ふと、視線を少し動かしてみると。
周囲の生徒達もその背を目で追っている。

カリスマ的な生徒会長、そしていつも隣にいる頼れる人物。
後輩からすると憧れがそこにはあるものだ。

もちろん、慧斗自身も、それが全く無いというわけではない。

口にすることは無いけれど。

「慧斗ー次移動教室だぞー」
「……今行く」

友人の声に、慧斗はゆっくりと立ち上がった。

生徒会の夏休み（準備）

生徒会で海に行くことになった。

のだが。

「何で水着買うのについていかなきゃ行けないんすか」

「あはは……」

目の前で楽しそうに和気藹々と水着を選ぶ女性人を見て。

呟いた慧斗に、九郎はもはや苦笑いしか浮かばなかった。

「まあ、水着以外にも必要物の買出し……と、その荷物もちだな」

「というか何時まで続くんすか、あれ」

「慧斗、よく覚えとけ。女性の買い物はとにかく長い。そして男はそれを待つ運命にあるんだ」

「……九郎先輩、なんか悟ってます？」

「桃子さん……九郎の母親が買い物好きだからな」

幼いころから既に慣れ親しんでしまったとはいえ、疲れないといえば嘘になる。

既に疲労感を感じるのは多分気のせいでは無いのだろう。

「先に他の買い物を済ませていても怒られはしないだろう。
が」
「目を離すのも、なあ……」
目を離したときに何が起こるかわからない。
3人とも身内の贔屓目を覗いても、容姿は整っている。
絡まれたりするかもしれない。
そして、それにたいしてしかるべき”対処”を行うだろう。
その（特に後者への）不安感は、今の疲労感をはるかに勝る。
「「「……」」」
三人は無言で向き合った。

「九郎先輩って本当苦労人ですね」
「おまけにじゃんけんも弱いと」

必要物資の買出しに向かいながら、慧斗と亜丞は言った。
九郎一人を女性人のもとへ残して。

「とりあえず頼まれたのは保存の利く食料類と皿とコップと」
「ビニールシートとかはいいんすか？」
「ああ、屋根とデッキがあるらしいから大丈夫だそうだ」
「……会長も亜丞先輩もたいがいですけど、どんだけ金持ちですか生徒会って」
「……俺もそう思うよ」

亜丞はやや視線をそらしながら答える。
今回行くのは一般的な普通の海である。
が、その一部分を誘ってきた元生徒会長の家が”所有”しているらしい。

「まあ、そのおかげで色々助かる部分もあるしな」
「こっちとしては面白ければ構いませんけど」
「そうだな……」

不意に言葉を止めて、亜丞は表情を歪めた。

「ん？」
「げ」

飲料水売り場の前で、オレンジと赤の野菜ジュースを見比べている人物。
見られていることに気づいて亜丞に視線を向ける。
それにより、亜丞の表情はさらにゆがんだ。

「これはこれは」
「何でいるんだよ行平お前」
「それはもちろん、ここが店で俺が消費者だからだ」
「しかも相変わらず面倒くさい」
「亜丞先輩のお知り合いですか？」
「……一応」
「何でそんなに躊躇ったんですか」

里見行平（さとみ ゆきひら）。
天祥学園とも交流がある、聖名下（みなもと）学院。
そこで、王貴と同じように生徒会長を務めている人物。
そして。

「幼馴染に対してひどい奴だな」
「そんなこと露ほども思って無いだろうがお前は」

亜丞の幼馴染でもある。

「俺が何処で何をするかは、俺だけが決めることが出来る。そうだろ？」
「それはそうだが、言い方がイライラするんだよ」
「まあ、俺だから、な」

イラッとしながらも、亜丞は呆れたようにため息を吐いた。
行平は、なんというか、非常に面倒くさい。
厳しく言えば、うざい。
そしてそれをわざとやっている節があるので、より面倒なのである。

もっとも、そのお陰で常識というものは理解しているので、そこは幸いなのだが。

（面倒なのには変わりないよな）

「ところで、お前はこれをどう思う？」

「どうって……野菜ジュースだろ」

「トマトのみの赤い奴と、にんじんのほかほうれん草などを含みながらもオレンジの奴。栄養面からすると後者の方が豊富に感じられるが、色からすると前者の方が妥当だろう？」

「どうでもいいわ！！」

「で、実際何してたんです？」

ペースに乗せられる亜丞の隣で、マイペースに慧斗が尋ねた。

「まあ、ぶっちゃけると暇だっただけなんだがな」

「暇って……お前、一人か？」

「いや？全員だが」

「全員って……まさか！？」

「あらまあ、鈴村亜丞さんじゃありませんか」

その声に、亜丞は見て分かるほどびくりと肩を震わせた。

動かない亜丞に代わり、慧斗が振り返る。

そこにいたのは、”お嬢様”。

ふわりとした長いスカートを指先で軽くつまみ。

にこりと軽く首をかしげて見せるその笑みは、知っているものに少し似ていた。
質素すぎず、それでいて派手ではない華やかさを纏い、佇む姿。
それはまさに、典型的ともいえる”お嬢様”であった。
「やあ永久子さん、2階はもう良かったのか？」
「ええ、一通り見て回りましたから」
亜丞を挟むようにして並んだ行平と笑顔で会話を交わす。
秋篠永久子（あきしの とわこ）。
行平と同じく聖名下学院の生徒であり、生徒会に所属している。
そして、行平と同じく亜丞の幼馴染でもあり。
「ドウモ永久子サン、オ元気ソウデ」
「亜丞さんは、大丈夫じゃなさそうね。口調が片言よ？」
「緊張でもしてるのだろう、こいつめ」
「お二人とも心底楽しそうすね」
珍しく亜丞が弄られている様子を、慧斗は（他人事に）眺めていた。
「それより行平さん、皆が探していたようですよ？」
「もうそんなに時間がたっていたか。そろそろ誰か怒り出している頃か？」
「ええ、さっき見たら一人既におかんむりよ」
「分かってるんなら帰ってやれよ」

恐らく、行平たちの同級生か後輩あたり、同じ生徒会のメンバーであろう。
不憫に思いながら、そして共感を覚えながら亜丞はあさっての方を向いた。

「そうするとしようか。それじゃあな」
「それでは、また」

そう言って、亜丞と慧斗に向かい挨拶をしてから。
二人はようやくその場を去っていった。
見送るようにその背中を見つめる慧斗の隣で、亜丞は顔に手をやっていた。

「お帰り、買出しご苦労さん」

ようやく終わったのだろう。
レジに並ぶ女性人を見守るようにたっていた九郎が、合流した亜丞と慧斗に声をかける。

「お疲れ様です九郎先輩」
「おう……なんかそっちも疲れてるみたいだけど」

主に亜丞が、と付け加えて。

慧斗の少し後ろで、あまり良くない顔色の亜丞を見て、九郎は尋ねた。

「まあ、色々ありまして……というか、会いまして」

「へ？」

「……結局九郎と同じくらい疲れた、絶対」

「まあ、傍から見てる分には面白かったですよ」

「そうですね！」

会計を済ませ戻ってきた王貴たちにも大丈夫かと訪ねられるが。

亜丞はただ、ため息を吐いて返した。

前原世乃の憂鬱事項（前書き）

登場人物　前原世乃　笹希雪

前原世乃の憂鬱事項

前原世乃。

天祥学園二年、生徒会役員。
真面目で成績も優秀。
生徒からも教師からも一目おかれる模範生。
なのだが。

「……」

いつものしっかりした姿はどこへやら。
教室の机に突っ伏してうなだれる。
そんな姿を見るのは、仲のよいクラスメイトか友人くらいのもの。

理由はただひとつ。

「世乃ー……またか？」
「……」

友人の希雪の言葉に、びくりと反応する。

そう、また。

また、”二位”だったのだ。

世乃は何故か、万年二位なのである。

もちろん、成績には波がある物なので、不調な際は下がるし好調ならば上がる。

しかし、どんなに頑張っても、世乃は一位をとることができないでいた。

真面目な彼女は、負けず嫌いでもあった。

「また……また……っ！！」

「とりあえず落ち着け」

ファンが見たら驚くぞー、と、小声で付け足しながら。

希雪は世乃の頭を撫でて励ました。

彼女からすれば、二位でも十分すぎるほどなのだが。

もちろん、世乃とて二位が悪いなどとは思っていない。

しかし。

「また、倉石君……」

「……ああ」

学園の”王子”倉石王次郎。
王子の名にふさわしく、文武両道容姿端麗。
学園の女子の半分以上は、少なくとも憧れるといわれている。
そう、常に世乃の上に居る人物が同じなのである。
そのことが、世乃に一番大きなダメージを与えていた。
同時に、対抗意識をも。

「で？もう諦めるの？」
「……諦めない」
そう、諦めはしない。
なぜなら、世乃にはどうしても一位になりたい目的があるから。

「別に、一位になったらじゃ無くてもいい気はするんだけど」
「駄目なの。そうでもしないと、自身がもてない」
気弱な世乃は、目標を作ることで自分に自身を持たせようとしたのだ。
それがまさか、このような弊害になるとは思いもせずに。
「だって、その目的に邪魔されてるわけでしょ？」
「……言わないで」
そう。
倉石王次郎への告白（世乃の目的）を、その本人に防がれて

いる。

空しくなり、世乃はまた机に突っ伏した。

（……倉石、今度ちょっといじめとくか）

ちょっといじめる、にとどめておくのは、大事な友人の思い人という部分での遠慮だろう。

希雪は世乃の頭を撫でながらため息を吐いた。

いつもの放課後（前書き）

登場人物　笹希雪　朝比奈凌　前原世乃　上條九郎　高良和氏

いつもの放課後

「じゃあ、これ頼むな」
「うん、わかった」

九郎は世乃に用事を頼み、教室を出ようとした。
そのとき。

「！！」

がらりと、勢いよく開いたドアはその反動で閉じた。
そのあいた隙に入り込んだ少女は、その勢いのまま室内の少女の後ろに隠れた。

「……希雪？」
「どうしたの？」

驚きつつ振り返る九郎の声は聞こえてないのか、希雪は何も言わない。
何となく日常でもある友人の様子に、世乃は、少し驚きながらも尋ねた。
いつもの強気ではなく、弱りきった小動物のような状態で、しゃがんだ希雪は見上げた。

「駄目だ……もう、駄目……」
「「……」」

あ、駄目だこれ。

そう思いながら、九郎と世乃は苦笑いを浮かべた。
やはり、いつものことか、という風に。

そう思っていると、教室のドアがまた開いた。

「失礼するよ……やあ、九郎」
「凌？」
「！！！」
「凌君、どうしたの？」
「やあ、世乃ちゃんも。今日も相変わらず可愛いね」
「相変わらずだなあ」

笑いながら返すが、こういうことにあまりなれていない世乃は少し顔を赤らめる。
その後ろで、悲鳴のような声を幽かに上げながら、希雪が震えて肩を掴んだ。

「世乃に近づくな！」
「じゃあ希雪ちゃんがこっち来てくれる？」
「ひいいい！！」

近づいて、顔を近づけにこりと微笑んだ凌に見つめられ、希雪は大きく悲鳴を上げた。
座り込んだまま、勢いよく世乃を盾にするようにして隠れた。

「可愛いなあ」
「……凌君」
「好きな子ほどいじめたいっていうやつだよ」
「ほどほどにね……」

いじめ、といっても、実際にいじめているのかといえばそうではない。

希雪は、きざな台詞回しや行動が、鳥肌が立つほど苦手としている。
世乃とて得意ではないが、女の子としては、ここまで嫌がりはしない。
しかし希雪は、照れているのだろうが、度を越えて嫌悪するほどに。

なれない、柄にあわない、寧ろ自分が言う側、というのが理由の内にあるだろう。

対する凌は、素でさらりとそういうことを言える人物である。

「よるな、触るな、しゃべるな来るな！！」

（……嫌がるからやるって、気づかないのかな……）

眺めながら、九郎は心の中で呟いた。
否、凌なら嫌がられなかったとしてもやるのだろう。
そして、希雪が嫌がらないことなど無いのだろう。

「やっぱここに居たか。九郎はめずらしいな」
「ああ、ちょっと世乃に用事」
「和氏は部活終わったの？」
「ああ、で、凌探しに来た。……いつも通りだな」
「うん、いつも通り」

何となく安心感さえ生まれる光景に、小さく笑った。

処方箋（前書き）

登場人物　帝人王貴　上條九郎　鈴村亜丞　前原世乃

「あ、王貴、そろそろ薬の時間だ」

そう言うと、九郎は鞄から袋を取り出す。
王貴も、飲んでいたお茶をひとまず置いた。

「お湯あるか？」
「お茶じゃ駄目？」
「駄目に決まってるだろ……水でもいいから、用意」

「相変わらず九郎はまるでお母さん、だな」
様子を見ていた亜丞は笑う。
世乃はふと気になっていたことを尋ねた。

「亜丞君、何で王貴ちゃんの薬を九郎君が持ってるの？」
「ああ、あいつの家診療所なんだが、王貴のかかりつけなんだ」
「そうなの？……え、じゃなくて、何で九郎君が薬の管理を

してるの？」
「……ああ、そっちか」

「これとこれとこれだよね？」
「これとこれだ……あ、粉が先だからな」

「あの通り、大量の薬を正しく飲まないといけないだろ？」
「うん……大変だよね」
「で、面倒だろ」
「まあ……そうだよね」
「だからだ」

「……え」

「……苦い」
「ほら、口直し」
「ん」

お茶を受け取って飲む王貴を見て。
世乃は驚きつつも納得する自分に、苦笑いをこぼした。

ツンとした恋（前書き）

登場人物　大河内愛理　上條九郎

ツンとした恋

「きゃ……」

教室の前方。
黒板を消していた大河内愛理は、後ろへとバランスを崩した。

「っ……？」
「大丈夫か？」
「！！？」

後ろへ倒れることの無かった愛理を支えていたのは、クラスメイトの上條九郎であった。
寄りかかっていることに気づき、慌てて愛理は離れて体制を立て直す。

「平気よ、このくらい」
「そっか。手伝おうか？」
「別にいいわ」

ツンとした返しにも、気を悪くすること無く。

むっとした顔で、愛理は顔をそらしてまた黒板を消し始めた。
九郎が離れたのを確認して、小さく息を吐く。
（また、やっちゃった……）
人見知りからくる、人に対するつれない態度。
改めなければいけないことは分かっていても、なかなかできない。
付き合いの長い友人だといいが、初対面の相手などにとっては、いい気はしないだろう。
でも、少なくとも彼はそうではなかった。
初対面のときも。

進級して、新しいクラスになったばかりの頃。
愛理は、教室の扉を出たところで人とぶつかってしまった。
どちらが悪いわけではなかったのだが、何時もの様に、愛理はツンとした態度を取った。
「ちょっと、気をつけなさいよ！」
声に出してから、はっとする。

またやってしまった、そう思いながら相手の顔を見る。

「悪い、大丈夫か？」

怒ることも、ひるむことも無く。

ただ本当に心配したように、愛理にそう尋ねてきた。

「……大丈夫よ」

「そっか、ならよかった」

子供を心配する親の様に微笑むその姿は、とても印象深かったのを覚えている。

（……怒ってないよね）

ちらりと後ろを見る。

九郎は何事も無いように、自分の席にいる。

そして何時もの様に、あの可愛い幼馴染の世話を焼いているのだ。

「……ありがとう」

聞こえていないと分かりながら、とても小さな声で、愛理は呟いた。

白線とグラウンド（前書き）

登場人物　高良和氏　厳木風子

白線とグラウンド

グラウンドに惹かれた真っ白な線を見つめた。

「完璧ね……さすが私」

「やったのは俺だけどな！！」

腰に手を当てて言い切った風子に、息を切らせながら和氏は怒鳴った。

まだ朝早く、人気の少ない学園の敷地内。

昨日の雨で崩れたグラウンドの線を、引きなおしていたのだった。

「あら、引く場所を指示したのは私よ？」

「そうだけども！なら線引きも自分でやれよ！」

「そしたら和氏の仕事がなくなるでしょ」

そもそも何で俺が、といいかけて、和氏は口をつぐんだ。

グラウンド整備は体育委員会の仕事である。

和氏は体育委員ではない。

ただ、部活の朝練でその場に居ただけである。

厳木風子。
天祥学園の中でも目を引く容姿の持ち主であり。
女子にして、体育委員長を努める彼女。
誰もが知っている。
もちろん、本人も含めて。
澄んだ朝の風に髪をなびかせる彼女を見る。
まるで、雑誌の表紙を飾れるような絵になる姿。
本人がそれを言うのもどうかと思うのだが、それも彼女ならと思えてしまうのだろう。
線引きも、確かに彼女の指示があったから手早く綺麗にすんだ。
これを自分でやってくれれば文句は無いのだが。
「どうかした？」
「……何でもないです」
体育委員長は伊達じゃなく、頭も運動能力もキレる。
勝てないことなどもう知っている。
「手伝ってくれてありがとう。和氏なら上手くやってくれる

って思ってた通りね」

「……おう」

そう、彼女には勝てない。

どうぞご自由に（前書き）

登場人物　鈴村亜丞　秋篠永久子

どうぞご自由に

幼馴染。
遠い親戚にも、当たるらしい。
だから、昔からの付き合いではある。
だけど、未だに付き合い方が、分かっていないのだろう。

「あら亜丞さん、ごきげんよう」
「何してるんですか永久子さん」
亜丞は見上げたままため息を吐いた。
木の上で、枝の上に腰掛けた永久子が、小さく手を振っているその状況に頭を悩ませて。

老舗の料亭である亜丞の家は広く、店とは別の庭園が会った。
そこに植えられた中でもかなり古く大きな木の上で。
「今日はいい天気ですから、木漏れ日がとても綺麗」

「そうですね。で、何してるんですか」

何時ものマイペースだが、とりあえず状況を把握したい。
何故、そんな高いところに登っているのか。
その長いスカートで、どうやって登ったのか。
そして、どうやって降りるつもりなのか。

亜丞はもう一度尋ねる。

「ところで亜丞さん」
「ところでじゃなくて！何でそんなとこいるんだよ！？危ないから降りなさい！」

我慢できずに亜丞声を上げる。
が、気にせずに永久子は微笑んだ。

「ねえ亜丞さん」
「はい！？」

「亜丞さんは、好きですか？」

「……はい？」

「家に寄ったら迷い猫を見つけて、追いかけてたら木に登っていた、と」
「そうなりますね」
降りてきて縁側に座った永久子の隣で、亜丞は疲れた顔をした。
（結局、彼女が機から降りる為に、亜丞は梯子を持ち出すことになった）
永久子の膝の上には、真っ白で、ふわりとした、子猫。
「毛並みも綺麗ですし、きっと迷子ですね」
「このあたりで猫を飼ってる家ねえ……」
考えるが、とりあえずは思いつかずに。
呑気に昼寝をする猫を見て、亜丞はため息を吐く。
その猫を撫でながら、永久子は微笑んだ。
「こんなに暖かいのに、まるで雪の様に真っ白。素敵」
ね、と笑顔を亜丞に向ける。
笑顔を向けられた亜丞は、はあ、とため息を吐く。
意図してかそうでないかは分からないが、先程から会話はかみ合わない。

しかし、不思議と嫌な気分はしていないのだ。
大変疲れはするが。

「雪花、でどうかしら」
「飼うんですか？」
「スノウでもいいけど、この家には和風の名前の方が似合うわよね」
「家でかよ！」
「好きなのでしょう？」

猫が。
目的語を抜いた言葉で、永久子は尋ねる。
う、と亜丞は言葉に詰まりながらも、何か言い返そうとするが。

「会いに来てもいいかしら？」

にゃあ、と一鳴き。
満足しているのか、白い尻尾を一度上げて、また降ろす。

それを聞いて、そして永久子の笑みを見て。
亜丞は、観念した。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5825u/

Scool!!

2012年1月14日02時51分発行